

〈論 文〉

中国語を母語とする日本語学習者における陳述副詞

「きっと」と「必ず」の習得

—中間言語知識体系の発達という視点から—

胡 娜[†] (東京外国語大学博士後期課程)

A Study on the Acquisition of the Adverbs “Kitto” and “Kanarazu” by
Chinese Learners of Japanese :

From the perspective of the development of learners' interlanguage knowledge systems

Hu, Na (Doctoral Course, Tokyo University of Foreign Studies)

キーワード : きっと、必ず、文末表現、中間言語知識

Key words : kitto, kanarazu, sentence-ending expressions, interlanguage knowledge

要旨 : 本稿では、短文作成問題と選択式問題という 2 種類のタスクを用い、中間言語の発達という視点から、日本語母語話者と比較しながら、中国語母語話者の日本語学習者における「きっと」「必ず」の習得実態を考察する。調査の結果、日本語学習者は文末の共起関係がある用法で日本語母語話者と異なる産出傾向が観察された。さらに、選択式問題と短文作成問題のタスク形式の違いによる回答の違いから、理解と産出が必ずしも一致しないということがわかった。最後に、結果や考察から考えられる日本語教育への示唆にも言及した。

Abstract : This study focuses on the declarative adverbs “kitto” and “kanarazu”, and through short-essay tasks and multiple-choice tasks seeks to examine how Chinese native speaker learners of Japanese acquire these two adverbs, in the context of the development of learners' interlanguage knowledge systems. The results of the study demonstrated that, with regard to sentence-final expressions whose usage is constricted by collocation rules, learners of Japanese produced different utterances compared to native Japanese speakers. Additionally, differences were apparent in the answers given to short-essay tasks compared to the multiple-choice tasks. Lastly, based on the results we make suggestions for improving Japanese language education.

原稿受理日 (2018-10-01)

査読後掲載決定日 (2019-01-15)

日本研究教育年報. 2019, Vol. 23, pp. 36-54. ISSN 2433-8923



[†] 本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY) 下に提供します。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

1.はじめに

Firth (1951) は、語の意味は共起語に依存すると指摘しており、語の意味は共起する語と切り離せないと言えるだろう。日本語の「きっと」「必ず」は陳述副詞であり、用法によって文末表現と様々な共起関係・共起制限を有する。例えば、「きっと…だろう」、「必ず…てください」、「必ず…なければならない」のような共起表現が挙げられる一方、「きっと」、「必ず」のいずれも否定表現と共起できないとも言われている (小林 1992)。日本語の第二言語学習者にとって、このような文末形式と共起関係がある陳述副詞の習得には、各語の意味だけではなく、共起する文末形式の習得も重要であろう。本稿は、中間言語の知識体系の発達という視点から、2種類のタスク¹を利用し、文末表現との共起関係・共起制限という側面に焦点を当て、中国語を母語とする日本語学習者における陳述副詞「きっと」と「必ず」の運用状況を考察する。

2.先行研究

本節では、本研究の研究対象になった「きっと」と「必ず」のそれぞれの用法および各用法の共起関係・共起制限をまとめる。次に、「きっと」と「必ず」の習得に関する先行研究を概観する。最後に、中間言語知識体系の発達理論を概観し、本研究の理論的根拠について述べる。

2.1 「きっと」と「必ず」の意味・用法に関する先行研究

これまで、「きっと」と「必ず」の意味・用法に関する研究が多く行われている (工藤 1982、石神 1987、佐治 1992、小林 1992、兪 1999、呉 1999、張 2002、王 2007 など)。それぞれの研究者によって、用法の名称が異なるが、解釈に大きなずれはないと考えられている。先行研究をまとめると、「きっと」には「推量」、「意志」、「指示・命令」、「必然」という4つの用法があるが、「必ず」には以上の4つの用法以外に「義務」の用法もある。それぞれの用法の例文は以下のようになる。

- 「推量」用法： (1) 明日はきっと雨が降るでしょう。
(2) 彼は必ず来る。(杉村 2009)
- 「意志」用法： (3) おれはきっとあの女を見つけるぞ。(王 2007)
(4) 二度と私の邪魔をしに来ないように、いつかは必ずお前をわがものにしてやるぞ。(王 2007、三島由紀夫『金閣寺』)
- 「指示・命令」用法： (5) 困ったことがあったら、きっと言ってくれよ。(王 2007)
(6) 使用する前に必ず説明書を読んでください。
- 「必然」用法： (7) 何か嘘をつくとき、その夜はきっと夜半に目が覚めた。(工藤 1982)
(8) 激しい運動をした後は必ず膝が痛い。(張 2002)

¹ 「タスク」は日本語教育においては一般的に教室活動において用いられる練習方法を指しているが、本研究では大神(1999)に準じ、学習者の能力を評価する際に使用される各種テストを意味するものとする。

「義務」用法： (9) 仕事中は必ずその場にいなければならない。(王 2007)

「きっと」と「必ず」には共に「推量」、「意志」、「指示・命令」、「必然」用法があるが、各用法において文末表現との共起関係・共起制限には微妙な差がある。例えば、佐治(1992)や工藤(2000)では、「必ず」は(10)(11)(12)のように「過去」述語、「否定」述語、「状態」述語の推量文では共起できないと指摘されている。他方、「きっと」は「～と思う」「～だろう」などのような「推量」を表す文脈が与えられていれば、以上のような制限はないと指摘されている。

(10) ² *³明日テストがあるから、彼は必ず (→きっと) 早く寝たと思います。(過去)

(11) *土曜日だから、彼は必ず (→きっと) 家にいないと思います。(否定)

(12) *あの人は良く運動する人だから、必ず (→きっと) 大丈夫でしょう。(状態)

また、小林(1992)によれば、「きっと」と「必ず」は(13)(14)のような「～たい」を含む話し手の願望・意志を表す文には用いられないとされている。

(13) *夏休みはきっと旅行に行きたい。

(14) *私は必ずアメリカに旅行に行きたい。

その理由については「自分自身の願望や意向を他人事のように推量で表現するのはおかしいと感じるから」、「『～たい』は実現の確率が100%保証されていないからそれを願望するという表現であり、これは『必ず』の意味とは矛盾することになる」とそれぞれ説明されている。

「指示・命令」用法において、「きっと」と「必ず」は「動詞の命令形」、「動詞連用形+なさい」などの命令表現と「動詞て形+ください」の「依頼表現」、そして、「～てほしい」「～てもらいたい」など、希望の表現から派生した「依頼表現」とよく共起する。「きっと」の「指示・命令」用法は責任感が感じられず、話し手の「信用する・約束する」というお願いの気持ちが感じられるのに対し、「必ず」には聞き手がそうする義務を負っている意図が感じられる。また、「指示・命令」と言っても、「要求事態の非実現」を図る「禁止」「否定」などもあるが、(15)(16)のように「きっと」も「必ず」も「来ないでください」「禁止する」「やめる」のような否定的な文脈では用いられないと呉(1999)が指摘している。

(15) *きっと来ないでください。(呉 1999)

² 例文(10)、(11)、(12)王(2007)から引用したものである。(→)は修正内容を提示する。

³ 「*」は不自然な文を表す。不自然な文の判定については、引用した例文の場合は原著の著者の判定に従い、作例の場合は日本語母語話者に判定を仰いだ。

(16) *必ず来ません。(呉 1999)

「必然」用法というのは、「人間の習慣、常識などの条件のもとで、そうなると決まっていること。それ以外になりようのないこと」である。「必ず」がこの用法で頻繁に用いられるのに対して、「きっと」のこの用法は書き言葉に限定されている」(工藤 1982)。関口 (2005) は以下の (17) は誤用と指摘している。また、王 (2007) は「きっと」の必然用法は、だんだん減少しつつあるという傾向が見られると述べている。

(17) *暇になると、私はきっと (→必ず) この店へ食べに行きます。(関口 2005)

次に、本研究で「義務」用法という名称を用いているが、張 (2002) は「必要」用法とも呼んでいる。ここでいう「必要」性は、主に文末のモダリティ表現「～なければならぬ」、「～ないといけない」から窺えるであろう。「きっと」には「義務」用法が存在しないため、以下の文には「きっと」を用いることができない。

(18) *テストのためじゃなく、宿題はきっと (→必ず) やる習慣を持たなければなりません。(張 2002)

以上、「きっと」「必ず」の意味・用法に関する先行研究、及びその異同をまとめた。

2.2 「きっと」と「必ず」の習得に関する先行研究

本節では「きっと」と「必ず」の習得に関する先行研究を概観していく。日本語学習者における「きっと」「必ず」の習得に関する先行研究には、主に王 (2004 ; 2006b ; 2014) がある。

王 (2004 ; 2006b) は、認知言語学の観点から日本語学習者が「きっと」「必ず」について、どのような意味知識を持っているかに関して調べた。その結果、日本語母語話者にとっては「推量」が「きっと」の典型的用法であるのに対して、中国人学習者の「きっと」の習得は、学習の進展に伴って進んでいくにもかかわらず、多くの中国人日本語学習者にとっては「意志」が「きっと」の典型的用法とみなされていると述べている。また、学習者に「きっと」の「意志」、「依頼」用法 (本研究では「指示・命令」用法) の適用範囲に関する知識が不足しており、類義語「必ず」との使い分けができない傾向があることも指摘している。さらに、「きっと」の用法の理解には、教科書や辞書の記述の影響が関与する可能性があることや、母語である中国語の“一定”からの転移があることが推察されている。

王 (2014) は、中国語が母語である日本語学習者の「必ず」の使用状況を調査した。学習者は「意志」用法でも、「推量」用法と「確率」用法 (本研究では「必然」用法) でも、

「必ず」に関する意味知識がない場合、母語の“一定”の意識に依存する傾向があるという特徴を挙げている。また、意志用法において、学習者は母語の“一定”のプロトタイプ
の転移を受けて多く使用し、中間言語としての「必ず」のプロトタイプを形成している。
さらに、習熟度が上がるにつれて、「意志」用法の使用は、母語話者に近づくような傾向が
あると述べている。

王 (2004 ; 2006b ; 2014) の習得研究は認知言語学の観点から学習者が持っている意味
知識を考察し、主に自由産出の調査方法を使用している。また、王の調査は多く産出され
た「推量」用法を中心に分析しているため、他の用法の運用状況が不明である。

本研究では、文末表現との共起関係・共起制限の両面に焦点を当て、日本語学習者が各
用法における文末表現との共起関係・共起制限について「わかっている」のか、また、そ
の2つの語彙を使って場面に合う文末表現を正しく産出すること、いわゆる「運用できる」
のかについて、すなわち、明示的知識と非明示的知識に関する学習者の習得状況を考察す
ることを目的として調査を行うこととした。そのため、調査紙には短文作成問題と選択式
問題という2つのタスク形式を設けた。

2.3 明示的知識・非明示的知識とタスクの設定

本研究は中間言語体系⁴の発達という視点から、2つのタスクを用い、学習者の習得状況
を考察しようとしているが、ここでは、まず中間言語知識体系の発達理論を概観し、2つ
のタスクを設定した理論的根拠について述べる。

認知心理学に基づく第二言語習得研究では、学習者の言語知識が明示的知識 (explicit
knowledge) と非明示的知識 (implicit knowledge) に区別されている。Krashen(1976)
は知識の体系を学習より得られた意識的な知識と習得により得られた半意識的な知識に二
分している。Bialystok (1978) は、学習者の中間言語知識体系には明示的知識と非明示
的知識の2種類が存在すると述べている。さらに Bialystok (1982) では、学習者の持つ
能力を細分化し、知識の「分析的要因」(analysed factor) と知識の「自動的要因」(automatic
factor) という概念を提示した。分析的知識 (analysed knowledge) とは Bialystok(1978)
で提示されている明示的知識、非分析的知識 (unanalysed knowledge) とは非明示的知
識に相当する。

また、エリス (1988) はこの理論を発展させ、学習者の言語運用能力は談話プロセスを
経る場合と認知プロセスを経る場合があると述べた。談話プロセスでは伝達内容に注意を
向け自分の発話した言語形式をモニターする時間もないため、「非明示的知識」が用いられ
ることが多い。それに対して認知プロセスでは、言語形式に注意を向け自分の発話形式を
モニターする時間もあるため、「明示的知識」が主に用いられる。大神 (1999) は過去の
先行研究をまとめ、明示的知識とは意識的に把握された文法規則に関する知識、非明示的

⁴ 「中間言語体系」とは、第二言語学習者の母語と目標言語の間に存在する動的な体系を指す。(Selinker 1972)

知識とは、半意識的あるいは潜在的に把握された知識であり、文法規則だけでなく談話や社会言語学的な知識も含まれると捉えている。このような学習者の知識体系の発達について、Bialystok (1982) を代表とした多くの研究者は「インターフェース」理論を展開し、学習した明示的知識が部分的、あるいは全面的に非明示的知識に移行する⁵という段階を踏むとしている。

本研究は、以上の先行研究を踏まえ、中間言語体系の発達という視点から、「きっと」や「必ず」の異同に関する学習者の明示的知識と非明示的知識という観点から考察を行う。そのため、調査紙は意味用法に関する知識を有しているかを調べるための選択式問題、実際の文脈の中で文を生成できるかを調べるための短文作成問題という 2 種類の問題を設けた。

選択式問題は、文法的か非文法的かを区別し、文法的である項目を選択する作業、また、選択された項目が提示された文脈に当てはまるかどうかを判断する作業が求められる。学習者が選択した副詞が提示された文末表現などの文脈に当てはまるかどうかをモニターする時間があるため、明示的知識が主に用いられるものと考えられる。

一方、短文作成問題は、学習者にヒントを与え、「きっと」「必ず」のどちらかを用いて「天気を予測」させたり、「勝ちたい決意」を表させたりする作業であり、いわゆる、伝達内容に注意を向け、自分の産出した言語形式をモニターする時間もない作業なので、運用に導く非明示的知識の発達状況を考察することも可能だろうと考えられる。2 種類の問題の回答状況を比較することを通じて、学習者が「きっと」「必ず」をそれぞれどのように理解し、運用上、どのような点に困難を覚えるのかをより詳しく考察することが可能だと考えられる。また、選択式問題からヒントを得、回答が互いに影響してしまう可能性を避けるため、自由記述式である短文作成問題を問題Ⅰ、選択肢問題を問題Ⅱとした。

3. 研究課題

前節の先行研究を踏まえ、本稿は以下の 3 点を研究課題とする。

- ①日本語母語話者と比較し、中国語母語話者である日本語学習者の「きっと」と「必ず」の運用においてどのような傾向がみられるのか。
- ②日本語学習者の回答状況は日本語の習熟度と関連しているのか。
- ③短文作成問題と選択式問題というタスク形式の違いによって学習者の回答状況にはどのような違いがあるのか。何故その違いが出るのか。

4. 調査概要と調査票

4.1 調査概要

- ①調査時期：2017 年 6～9 月

⁵ 研究により、前者を弱いインターフェース、後者を強いインターフェースとも呼ぶ場合がある。

- ②調査場所：中国（K 大学、Y 大学、A 大学）、日本（T 大学）
- ③調査対象者：中国の大学に在籍している日本語専攻の学習者（以下、JFL）97 名
日本の大学に在籍している日本語母語話者 60 名
- ④JFL の日本語習熟度：N1 レベルの学習者 51 名、N2 レベルの学習者 46 名

JFL 学習者を調査する際には、「きっと」「必ず」という言葉が既習であることを事前に担当教師と使用教科書を通じて確認している。

4.2 調査票の作成

調査票は「同意書」、「被調査者プロフィール」と問題から成り、学習者用、日本語母語話者用の 2 種類を作成した。ただ、これらは「被調査者プロフィール」の部分のみが異なるものである。

問題は、問題 I と問題 II で構成されている（【付録】参照）。各問題は 5 つの用法について 1 問ずつ設定し、合計 10 問である。問題 I は、提示された文章を読んだ後、「きっと」「必ず」のどちらかを用いて文を作るという 5 つの短文作成問題である。このようなタスクを通して、学習者が産出した「きっと」「必ず」と共起する文末形式のバリエーションを考察する。問題 II は選択式問題であり、各設問には a) きっと b) 必ず c) a と b どちらでもいい d) a と b どちらもだめ という 4 つの選択肢を設定している。参考として、【付録】では「きっと」あるいは「必ず」を記入する括弧内に正答を示してある（実際の調査票では空欄）。

各問題で考察しようとする用法は、以下の通りである。

表 1 各問題で考察する用法

短文作成	選択式	用法
問題 1	問題 1	推量用法
問題 2	問題 2	意志用法
問題 3	問題 3	指示・命令用法
問題 4	問題 4	必然用法
問題 5	問題 5	義務用法

以上、調査票の設問について解説を述べた。次節では、これらの結果について述べていく。

5. 調査結果と考察

5.1 短文作成問題の調査結果

本節では、問題 I の短文作成問題の回答において、母語話者と学習者それぞれの回答傾向を述べ、両グループの回答傾向の相違を比べる。さらに、日本語学習者の回答状況と日

本語習熟度との関連についても考察する。

5.1.1 日本語母語話者と日本語学習者との比較

本項では、各設問において学習者が産出した「きっと」「必ず」と共起する文末形式にどのようなバリエーションがあるか、日本語母語話者の使用状況と比較しながら、使用傾向を見る。

1) 問題1 「推量」用法

問題1は「きっと」の推量用法を考察するために設けた。「明日の天気を推測してください」という場面設定とした。問題1の「きっと」「必ず」と共起する文末形式のバリエーションの調査結果は、下記の表2の通りである。

表2 短文作成問題1「推量」用法の回答における共起表現のバリエーション

	きっと…だろう	きっと…だ	きっと…る	必ず…だ	必ず…る	その他
母語話者	90%	3%	7%	0%	0%	0%
学習者	39%	19%	11%	11%	5%	15%

学習者の回答では「きっと」「必ず」と共起する文末形式のバリエーションが多く、全てを表に反映するのが難しいため、使用率5%以上のもののみを図表内に個別列挙し、使用率が5%以下のものを「その他」にまとめた。表2に示したように、学習者は6種類以上の文末形式を使用しているが、日本語母語話者は3種類しか使用していなかった。

内訳を見てみると、母語話者の回答でも学習者の回答でも「きっと…だろう」の使用率が一番高い。ただし、母語話者の使用率は90%であり、学習者の使用率(39%)の2倍以上である。以下の(19)はその例である。母語話者に多く使用されている(19)が、問題1の典型的回答例として挙げられるだろう。

(19) 明日はきっと晴れるだろう。

問題1は「明日の天気を予測してください」という場面設定であり、「未知のものに対する不確かな判断」であるため、(19)のような不確実を表す文末形式「だろう」に類するものを使うことを期待していたが、実際の調査結果では、学習者は確言的な文末形式を多く使っていることが判明した。具体的に見ると、「きっと…Nだ」を使ったものが18例であり、全体の19%である。「きっと…Vる」を使ったものが11例、全体の11%である。さらに、「必ず…Nだ」と「必ず…Vる」を使った回答例もあり、それぞれ全体の11%と5%を占めている。下記の(20)(21)(22)(23)は回答例である。その他、「必ず…かもしれない」、「きっと…んです」などの回答例も見られた。

- (20) 明日はきっと晴れだ。
 (21) 明日はきっと晴れる。
 (22) 明日は必ず晴れだ。
 (23) 明日は必ず晴れる。

2) 問題 2 「意志」用法

次に、問題 2 は「今回こそ勝ちたいという強い決心を表してください」という場面設定で、話し手が「今回こそ勝つ」の事柄に責任を持ちながら実現させようという強い決心を学習者に表してほしいという意図から出題した。意志用法において、「きっと」「必ず」と共起する文末形式を調査した。調査結果は表 3 の通りである。

表 3 短文作成問題 2 「意志」用法の回答における共起表現のバリエーション

	必ず…る	必ず…たい	きっと…たい	きっと…る	きっと…だ	必ず…だ	その他
母語話者	89%	8%	0%	0%	0%	0%	3%
学習者	33%	24%	15%	10%	3%	3%	12%

意志用法において、「きっと」「必ず」と共起する文末形式のバリエーションを調査した結果、89%の母語話者は(24)のような「必ず…Vる」を使用している。また、(25)「必ず…たい」のような願望を表す表現を使う例も見られた(8%)。最後に、(26)のような終助詞「ぞ」で終わる回答例もある(3%)。使用率のみを考えると、(24)のように「必ず…Vる」を使用している回答は意志用法の典型的回答例と言えるだろう。

- (24) 今回必ず勝ちます。
 (25) 今回必ず勝ちたい。
 (26) 今回必ず勝ちぞ。

日本語学習者の問題 2 の回答を分析したところ、7種類の共起形式を使用しており、母語話者より多い。その中で「必ず…Vる」を使用している回答例は33%であり、一番高い。次に、願望を表す表現「～たい」で終わる回答例が見られ、「必ず…たい」の使用例は24%、続いて「きっと…たい」の使用例は15%であった。先行研究で言及したように、「必ず」は「～たい」のような話し手の願望を表す文には使えない。その理由について、小林(1992: 13)は『～たい』は実現の確率が100%保証されていないからそれを願望するという表現であり、これは『必ず』の意味とは矛盾することになる」と説明している。

しかし、実際の調査結果では母語話者も使用していることが見て取れた。また、使用率をみると、日本語母語話者60名の回答の中に「～たい」が使われたのはわずか5例であるため、典型的な回答例ではないと考えてもいいだろう。それに対して、学習者の回答で

は「～たい」で終わる回答例は 39%があり、かなりの比率を占めている。「その他」には「きっと…ましょう」、「きっと…ことができる」などのような様々な共起形式も散見された。

3) 問題 3 「指示・命令」用法

問題 2 の話し手自身に働きかけるものを「意志」用法と呼ぶのに対し、本研究は聞き手自身に働きかけるものを全て「指示・命令」用法と呼ぶ。一言で「指示・命令」といっても、気持ちの強さによって「きっと」を使うか、「必ず」を使うか、さらにどのような文末を使うかによって、全く異なる語気となるだろう。

問題 3 は、「連絡することをみなさんに注意してください」という場面設定のため、聞き手は断ることができず、100%実現させるという強い要求を表してほしいということを調査主眼とした。「きっと」「必ず」と共起する文末形式のバリエーションを分析したところ、母語話者であれ、日本語学習者であれ、「必ず…てください」という共起形式は最も多く使われ、それぞれの作成率は母語話者 85%、学習者 41%である。

表 4 短文作成問題 3 「指示・命令」用法の回答における共起表現のバリエーション

	必ず… てください	必ず…否定	必ず… なければならない	きっと…否定	必ず…る	きっと… てください	その他
母語話者	85%	0%	0%	0%	0%	0%	15%
学習者	41%	25%	9%	8%	7%	6%	5%

次に (27) (28) (29) のように、学習者が「必ず…否定」を使用しているものは 24 例あり、全体の 25%を占めている。(29) の「～だめ」は否定形ではないが、否定の意味を表しているため、「必ず…否定」のバリエーションにまとめた。

(27) 連絡せずに会社を休むのを必ずしないてください。

(28) 事前に連絡しないと必ず休めない。

(29) 連絡せずに会社を休むのは必ずだめだ。

佐治 (1986)、呉 (1999) は、「必ず」は「否定形」、また「禁止」「否定の意志」を表す表現と共起しないと指摘している。『非実現』を図る『禁止』などの表現と共起しないのは、「必ず」が「未実現事態の成立の強調」を表すものであるため、これらの表現とは意味的に相容れないからだ」と呉 (1999 : 49) はその理由を説明している。また、『日本語文型辞典』には「必ずは否定表現には使えない」と明記されている。以上の理由で、これらの文を誤用と判断することができるだろう。

4) 問題4 「必然」用法

問題4は「必然」用法を考察するために設けた。学習者に「必ず」を使って「梅雨時期に雨が降る確率は100%」ということを表してほしいという意図から出題した。母語話者の回答を分析したところ、97%の回答者は「必ず」を使用していることが分かった。そして、残りの3%の回答者は「きっと」を推量表現「～だろう」と一緒に使用していた。一方、日本語学習者には「きっと」を使用している例は53例あり、全体の55%を占めている。対して、「必ず」の使用例は43例あり、全体の45%を占めている。それぞれの使用例が50%に近い場合、この「必然」用法においては、「きっと」と「必ず」の使い分けは学習者にとっては困難なところであると言えるだろう。

表5 短文作成問題4「必然」用法の回答における共起表現のバリエーション

	きっと…る	必ず…る	きっと…だろう	必ず…状態	きっと…状態	その他
母語話者	0%	91%	3%	6%	0%	0%
学習者	40%	35%	10%	5%	3%	7%

また、「きっと」「必ず」と共起する文末形式のバリエーションを分析したところ、91%の母語話者は「必ず…Vる」を使用しており、(30)のような文を作成した。学習者の回答「きっと…Vる」の使用例も「必ず…Vる」の使用例も見られ、それぞれの使用率は40%と35%である。また母語話者の回答に見られた推量表現「きっと…だろう」の使用例(3%)も日本語学習者の回答にも10例(10%)がある。

- (30) 梅雨の時は必ず雨が降ります。
 (31) 梅雨の時はきっと雨が降ります。
 (32) 梅雨の時はきっと雨が降るだろう。

以上の回答例以外に、学習者の回答には「必ず…状態」(5%)のような「状態性のあるもの」を述語としている回答例も見られた。日本語母語話者の回答にも6%の使用例が見られたことが興味深い。ここで言う「状態性のあるもの」は主に「形容詞」、「名詞」のことを指す。以下の(33)(34)(35)はそれらの例である。

- (33) 梅雨の時は必ず雨が多い。
 (34) 梅雨の時は必ず天気が悪い。
 (35) 梅雨の時期は必ず雨だ。

5) 問題5 「義務」用法

問題5は、学習者に、「必ず…なければならない」を用い、「卒業論文を提出する」とい

う事柄を 100%実現しなければならないということを表してほしいということを調査主眼とした。

表 6 短文作成問題 5「義務」用法の回答における共起表現のバリエーション

	必ず… なければならない	必ず… てください	必ず…る	きっと… なければならない	きっと…る	その他
母語話者	85%	12%	0%	0%	0%	3%
学習者	38%	31%	15%	5%	3%	7%

問題 5 の回答における「きっと」「必ず」と共起する文末形式のバリエーションを調査した結果、85% (51 例) の母語話者は「卒業するまでに必ず論文を提出しないとイケない」のような義務を表す文末表現を使用して、文を作成した。また、「卒業するまでに必ず論文を提出しなさい」のような命令文 (7 例、全体の 12%) や、「卒業するまでに必ず論文を提出しましょう」のような勧誘文 (2 例、全体の 3%) も見られた。

一方、学習者は、38% (37 例) の学習者は「必ず…なければならない」の共起表現を使用した。31% (30 例) の学習者は「必ず…てください」の命令文を使って産出した。この 2 つのバリエーションの使用率はかなり近く、また問題 3 の「指示・命令」の回答を考察したとき、「必ず…なければならない」の回答例も見られたため、学習者が場面設定の意味を理解していない可能性があると思われる。

指示の方法が不明瞭だったことに関しては、本調査の反省点であり、問題文の意味を十分に理解できず起こった可能性が考えられる。「依頼表現と命令表現を使うことによって、要求事態の実現を話し手が聞き手に働きかける『強制力』が強められているが、『～なければならない』のような文末表現と共起することによって、要求事態が起こる『必然性』が強調」(呉 1999 : 49) されるように感じられ、そのニュアンスには微妙な差が存在する。このような微妙な差を学習者がしっかりと理解しているかどうかについては、今後の研究課題となった。

以上、母語話者と比較しながら、問題別で学習者の回答傾向を見てきた。学習者が産出した共起バリエーションの数が、母語話者のそれより多いという傾向は 5 つの用法で共通している。それはなぜなのか。原因の一つとして、「きっと」と「必ず」の複雑な性格があげられる。「きっと」と「必ず」は類義語であり、両語とも中国語の“一定”と翻訳することができる。例えば、問題 4 の回答で見られたように、「きっと」と「必ず」それぞれの使用例が 50% に近い。そのため、「きっと」と「必ず」の使い分けは学習者にとっては困難なところであると言えるだろう。また、「きっと」と「必ず」は多義の陳述副詞として、違う意味では、違う文末形式と共起している特徴を有している。このような複雑な性格を持っている言葉を運用する際、日本語母語話者は瞬時に適切な場面設定にあう副詞と文末表現をセットで選べるが、日本語学習者にとっては難しいだろう。

また、母語からの転移も原因の一つとして挙げられるだろう。王（2007）は中国語“一定”は日本語「きっと」「必ず」より使用範囲が広く、共起制限も少ないと指摘している。例えば、“一定”は否定表現と一緒に使えるのに対して、「きっと」「必ず」は否定表現と一緒に使いにくい。中国語母語話者の日本語学習者は日本語「きっと」「必ず」と中国語“一定”の相違が判別できず、母語の知識をそのまま日本語に用いてしまった可能性が高い。

5.1.2 学習者の回答状況と日本語習熟度との関連

本研究の調査対象者は習熟度の違いによって、日本語能力試験 N1 に合格している学習者（以下、JFL/N1）、日本語能力試験 N2 に合格している学習者（以下、JFL/N2）の 2 つのグループに分類した。日本語能力レベルが上がることによって、果たして「きっと」「必ず」の運用は上達しているのだろうか。

本節では、比較の便宜上、日本語母語話者が作成した典型的な回答例を判断の基準とし、その典型的回答例、またそれと類似しているものを産出した文を正用文と呼ぶ。例えば、短文作成問題 1 では、90%の日本語母語話者は「きっと…だろう」を使って「明日はきっと晴れるだろう」のような推量文を産出した。この「明日はきっと雨が降るだろう」という文は日本語母語話者の使用傾向を代表したものであり、判断の基準とする。以上の基準に従って、JFL/N1 と JFL/N2 の各自の正用率を下記の図 1 に示した。

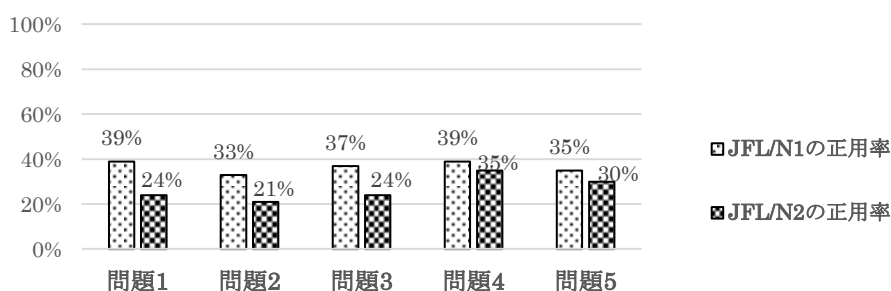


図 1 短文作成の各問題における JFL/N1 と JFL/N2 の正用率

上記の図 1 では、5 問とも N1 学習者の正用率は N2 学習者より高いように見えるが、両グループの平均正用率の差が統計的に有意かどうかを確認するために、有意水準 1% で両側検定の t 検定を行った。その結果、 $t(8)=5.06$, $p<0.01$ であり、JFL/N1 と JFL/N2 の正用率には有意な差があった。つまり、短文作成問題の各問題の回答状況は、学習者の日本語習熟度に関連している可能性があると言えるだろう。言い換えると、学習者の日本語能力レベルが上がるにつれて、「きっと」と「必ず」の習得が進んでいくという可能性も考えられる。

5.2 選択式問題の調査結果

本節では、問題 II の選択式問題の回答を分析する。学習者への調査結果を下記の表 7 に示す。左列は問題順に 5 問とその正答を挙げた。各問題の回答は正用、誤用別で提示して

いる。該当人数の横の括弧には問題全体に占める割合を記入した。

表 7 選択式問題（問題Ⅱ）の調査結果

問題	正用	誤用
1.彼は昨日調子よかったので（きっと）勝っただろう。	65 (67%)	32 (33%)
2.この前の試合で負けちゃったけど、今度こそ（必ず）勝って見せる。	57 (59%)	40 (41%)
3.明日はとても大切な会議があるので、（必ず）10時までに来てください。	77 (79%)	20 (21%)
4.このあたりは冬になると（必ず）雪が降る。	48 (49%)	49 (51%)
5.仕事中は（必ず）その場にいなければならない。	68 (70%)	29 (30%)

選択式問題の正用率を計算したところ、問題全体の平均正用率は 64.8% で、短文作成問題の 38.2% より高い。その内、選択式問題 1、問題 3、問題 5 の正用率は平均より高い。この 3 つの問題は、「～だろう」、「～てください」、「～なければならない」のような判断マークがついており、学習者が「きっと…だろう」、「必ず…てください」、「必ず…なければならない」とセットで覚え、選択した可能性があるだろう。学習者の知識体系には、「きっと…だろう」、「必ず…てください」のような共起関係があると考えられる。言い換えると、学習者がそれらの共起関係について「分かっている」と言うことができるだろう。しかし、以上の短文作成問題の考察では、これらの対応している文末表現の産出率が高くないことが分かった。

表 8 選択式の各問題における JFL/N1 と JFL/N2 の正誤率

問題	JFL/N1		JFL/N2	
	正用	誤用	正用	誤用
1	35 (69%)	16 (31%)	30 (65%)	16 (35%)
2	34 (67%)	17 (33%)	23 (50%)	23 (50%)
3	43 (84%)	8 (16%)	34 (74%)	12 (26%)
4	32 (63%)	19 (37%)	16 (35%)	30 (65%)
5	38 (75%)	13 (25%)	30 (65%)	16 (35%)

また、選択式問題の回答状況と日本語能力レベルとの関連を考察した。上記、表 8 に JFL/N1 と JFL/N2 の回答をまとめた。正用率を見たところ、3 つの傾向が見られた。まず、N1 レベルの学習者の正用率は、N2 レベルの学習者の正用率より高い傾向にあるということである。また、N1 レベルの学習者の正用率は全て半数を上回ることであり、最後に、問題 4 の正誤率では、N1 レベルの学習者の正用率が過半数を超えているものの、N2 レベルの学習者の誤用率が過半数を超えていることである。N2 レベルの学習者にとっては問題 4 の「必然」用法が一番困難なところであると言えるだろう。

さらに、両グループの平均正用率を計算すると、JFL/N1 は 71.6% で、JFL/N2 の 57.8% より高い。両グループの平均正用率の差が統計的に有意かどうかを確認するために、有意水準 5% で両側検定の t 検定を行ったところ、 $t(8)=2.636$, $p<0.05$ であり、JFL/N1 と

JFL/N2 の平均正用率の差には有意差があると認められた。

5.3 短文作成問題と選択式問題のタスク形式の違いによる回答の違い

前節まで、短文作成問題と選択式問題の分析を行ってきたが、小林（2001）は、習得の途中では、課題によって同じ文法項目でもできたりできなかったりするものであり、異なるタスクを行うことによって異なった誤用が現れると指摘している。さらに、程（2015）は学習者のモダリティ表現「ハズダ」の使用意識を調査した際に、選択式問題と短文作成問題のタスク形式の違いによって学習者の回答には誤用のゆれが見られたことを報告している。本調査においても、タスクによって学習者の正誤率に違いが現れるのか、現れるとしたらどのようなずれが現れるのか、さらにそのずれはどのような意味を有しているのかについて本節で考察する。

本調査の短文作成問題と選択式問題は5つの用法をめぐって1問ずつ設定した。比較する際には、両タスク自身の難易度の差異による影響を極力無くするため、ペアにした各問題の全体的な正誤率を比較するのではなく、まず、一方のタスクで正用を産出した回答者の回答のみを抽出する。その回答者がもう一方のタスクでどのような回答を行ったのかを分析していく。具体的な手順として推量用法を例に挙げると、まず、短文作成問題1で正用を産出した回答者の選択式問題1の回答状況を考察する。その後、分析対象を逆にし、選択式問題1で正用した回答者の短文作成問題1の回答状況を考察し、一定の傾向が見られるのかについて考察していく。両タスクの回答状況を比較した結果を、下記の表9に挙げる。

表9 両タスクの比較結果

	短文作成問題の正用群における 選択式問題の回答		選択式問題の正用群における 短文作成問題の回答	
	正用率	誤用率	正用率	誤用率
推量用法	81%	19%	46%	54%
意志用法	86%	14%	34%	66%
指示・命令用法	92%	8%	45%	55%
必然用法	78%	22%	39%	61%
義務用法	95%	5%	41%	59%

上記の比較を通し、短文作成問題で正解した回答群に対応した選択式問題の正用率はそれぞれ81%、86%、92%、78%、95%である。さらに、選択式問題で正解した回答群に対応した短文作成問題の誤用率はそれぞれ54%、66%、55%、61%、59%である。換言すると、短文作成問題の正用者、つまり「きっと」「必ず」の使い分けや場面に合う文末表現の使用ができる学習者の中で、約8割の人が選択式問題でも正解していることに対し、選択式問題で正しく選択した正解者の約6割は、短文作成問題において、「きっと」「必ず」の使い分けや運用上の誤用をしていることが明らかになった。

以上の調査結果では、短文作成問題と選択式問題形式の違いによる回答状況の違いが見

られた。そのタスクの形式による回答状況の違いはどのようなことを意味しているのだろうか。先行研究 2.3 で言及したように、学習者の中間言語体系には、2 種類の知識体系があり、状況により使われる言語知識も異なる。本調査の選択式問題では、選択した副詞が提示された文末表現などの文脈に当てはまるかどうかをモニターする時間があるため、明示的知識が主に用いられるものと考えられる。一方、短文作成問題では、伝達内容に注意を向け自分の産出した言語形式をモニターする時間がない作業なので、主に運用に導く非明示的知識が使用されると予想される。以上の調査結果は、選択式問題と短文作成問題において活用する知識体系が異なるという考えに沿うものではないだろうか。選択式問題で主に用いる知識は学習者が比較的良好に活用することができたのに対し、短文作成問題で主に用いる知識体系は活用できた学習者と十分に活用できなかった学習者がいると考察される。

また、Bialystok (1982) を代表とした「インターフェース」理論の立場と照らし合わせると、選択式問題ではよくできていたのに、短文作成問題で運用上の誤用のある文を産出しているのは、学習した明示的知識を持っているにもかかわらず、それがまだ十分に非明示的知識に転換できていないからではないだろうか。いわゆる、「わかっている」が運用「できない」ということだろう。学習者が日本語を使えるようになるということは、日本語を使う手続き的な非明示的知識を獲得するということであると小林 (2001) が指摘している。また、奥野 (2005) は「言語知識の所持は、その運用力の所持を必ずしも意味せず、実際の言語使用においては、所持されている言語知識を運用に向けて処理的に扱うことが必要である」と指摘している。このような知識の転換の過程において、教える側がどのような役割を担うべきかについては、今後の課題として挙げられる。

6.まとめと今後の課題

まず、本調査で明らかになった点を整理する。日本語学習者の産出を分析したところ、日本語学習者は「きっと」「必ず」の使い分けにおいては、特に文末の共起制限がある用法で日本語母語話者と異なる産出傾向が見られることがわかった。日本語母語話者の回答と比較したところ、中国語母語話者の日本語学習者は、「必然」用法では「きっと」「必ず」の使い分けができない傾向、「推量」用法では「きっと」を「きっと…Vる」、「きっと…Nだ」のような確言表現と共起させる傾向、「意志」用法では「きっと」「必ず」を「～たい」と共起させる傾向、また「指示・命令」用法では「きっと…否定」「必ず…否定」のような禁止表現を多く使用する傾向が見られた。

日本語習熟度との関連性を考察したところ、短文作成問題の回答であれ、選択式問題であれ、N1 レベルの学習者と N2 レベルの学習者の間に統計的有意差が認められ、習熟度による正誤率の差が見られた。

さらに、中間言語知識の発達という視点からタスク形式の違いによる正誤率の差を比較すると、選択式問題で正解した回答者の約 6 割が短文作成問題で不適切文を産出している

のに対し、短文作成問題で正しく運用できた回答者は、選択式問題において約 8 割が選択式問題でも正解している、という結果が観察された。選択式問題で正しく選択できたのにも関わらず、短文作成問題で不適切文を産出しているのは、明示的知識を持っているが、それがまだ十分に非明示的知識に転換していないからではないかとも考えられる。つまり、「わかっている」のだが、運用は「できない」ということだろう。

これらの結果を総合すると、中国語母語話者の日本語学習者における「きっと」「必ず」の運用上には未だ問題が残っていることが分かった。教育現場への示唆としては、日本語の「きっと」「必ず」と中国語“一定”の意味・用法の違いを明示的に提示した上で、具体的な場面を想定しながら、それぞれのニュアンスを示すというような運用につながる指導方法が有効であろう。また、「きっと」と「必ず」は多義の陳述副詞として、異なる意味では、異なる文末形式と共起している。その意味は共起する語に依存していると言えるだろう。そのため、「きっと」「必ず」の各意味を導入する際には、共起する文末形式や共起制限を一緒に提示することが、学習者にとって速やかな習得につながりやすく、それを学ぶことによって自動的にそれらの知識にアクセスできるのではと考える。

本研究は先行研究の知見を援用し、非明示的知識及び明示的知識という中間言語知識体系の概念を理論的枠組みとして考察を進めてきた。しかし、学習者の中間言語知識体系は様々な要因が作用しあい、常に変化していくものである。今後は他の言語を母語とする学習者の習得状況についても調査したいと考えている。対照群として、他の言語を母語とする学習者のデータを収集すれば、より客観的に母語転移をはじめ、他の影響要因を調査できるだろうと思われる。

参考文献

- 石神照雄 (1987) 「陳述副詞の修飾」『ケーススタディ日本文法』おうふう pp.96-101
- エリス, R (1988) 『第 2 言語習得の基礎』株式会社ニューカレントインターナショナル 牧野高吉 訳
- 王冲 (2004) 「日本語陳述副詞『きっと』と中国語語気副詞“一定”との対照研究—日本語教育における陳述副詞『きっと』の指導のために—」『人間文化論叢』7 巻 pp.325-334 お茶の水女子大学大学院『人間文化論叢』編集委員会
- (2005) 「中国の大学日本語教育における副詞の指導への考え—『きっと』『必ず』の場合—」『人間文化論叢』8 巻 pp.259-266 お茶の水女子大学大学院『人間文化論叢』編集委員会
- (2006a) 「陳述副詞『きっと』の意味構造と日本語教育への応用可能性—認知言語学観点から—」『日本認知言語学会論文集』6 pp.454-463 日本認知言語学会
- (2006b) 「副詞『きっと』の習得に関する研究—中国人日本語学習における典型的用法から考える—」『日本語教育論集』22 pp.19-31 国立国語研究所日本語教育基盤情報センター
- (2007) 「認知言語学的観点を取り入れた陳述副詞『きっと』『必ず』の意味研究:日本語

- 教育のために」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士学位論文（未公開）
- (2014) 「中国人日本語学習者の陳述副詞『必ず』の習得研究」『知性と創造:日中学者の思考』No.5 pp.121-131 日中人文社会科学学会
- 大神智春 (1999) 「タスク形式の違いによる中間言語の可変性」『第二言語としての日本語の習得研究』3号 pp.94-110 第二言語習得研究会
- 奥野由紀子 (2005) 『第二言語習得過程における言語転移の研究—日本語学習者による「の」の過剰使用を対象に—』 風間書房
- 工藤浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『国立国語研究所報告 71 研究報告集 3』 pp.45-52 秀英出版
- 呉珠熙 (1999) 「『きっと』『必ず』の意味・用法」『筑波応用言語学研究』6 pp.41-53 筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域
- 小林典子 (1992) 「『必ず・確かに・確か・きっと・ぜひ』の意味分析」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』7 pp.1-17 筑波大学留学生センター
- (2001) 「第4章 誤用の隠れた原因」『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 佐治圭三 (1992) 『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』 ひつじ書房
- 杉村泰 (2009) 『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』 ひつじ書房
- 関口要・堀伸一郎・黄淑妙 (2005) 「台湾人日本語学習者作文データベースを利用した誤用分析—副詞の使用とその誤用傾向について—」『2005年日語教学国際会議論文集』 pp.333-344 台湾東呉大学日本語文学系
- 張根壽 (2002) 「『必ず』の共起条件と意味」『筑波日本語研究』7 pp.48-62 筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科日本語学研究室
- 程焱 (2015) 「中国の大学日本語専門教育における学習者の『ベキダ』と『ハズダ』の使用意識について—短文作成問題と選択問題に見られる誤用の分析結果から—」『日本語教育』160号 pp.110-126 日本語教育学会
- 俞曉明 (1999) 『現代日語副詞研究』大連理工大学出版社
- Bialystok, E. (1978) A Theoretical Model of Second Language Learning. *Language Learning* 28 pp.69-83
- (1982) On the relationship between knowing and using linguistic forms. *Applied Linguistics Learning* 3 pp.181-206
- Firth, J. R. (1951) Mode of Meaning. *Papers in Linguistics 1934-1951* (翻訳:『ファース言語論集 1(1934-1951)』研究社出版 pp.190-215 大東百合子 訳)
- Krashen, S. (1976) Formal and informal linguistic environments in language acquisition and language learning. *TESOL Quarterly* 10 pp.157-168
- Selinker, L. (1972) Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics* 10 pp.209-231

【付録】

問題Ⅰ 提示文に従い、「きっと」「必ず」のどちらかを使って文を完成させてください。

1. 星がたくさん出ると翌日は晴れるとよく言われています。今夜はたくさんの星が出ています。

質問：「きっと」、「必ず」のどちらかを使って、明日の天気を予測してください。

2. あなたは今までの2回の試合でAさんに負けています。今回こそ勝ちたいです。

質問：「きっと」、「必ず」のどちらかを使って、今回こそ勝ちたいという強い決心を表してください。

3. 連絡しないで会社を休むのはだめです。

質問：「きっと」、「必ず」のどちらかを使って、連絡することを部下に注意してください。

4. 梅雨時期は100%といっていいほどたくさんの雨が降ります。

質問：「きっと」、「必ず」のどちらかを使って、梅雨時期の天気の特徴をみなさんに紹介してください。

5. 卒業するまでに卒業論文を提出しないといけません。

質問：「きっと」、「必ず」のどちらかを使って、以上のルールを四年生のみなさんに説明してください。

問題Ⅱ 次の文の（ ）に入れるのに最もよいものを、a. b. c. d から一つ選びなさい。

1. 彼は昨日調子がよかったので（ a ）勝っただろう。

a) きっと b) 必ず c) aとbどちらでもいい d) aとbどちらもだめ

2. この前の試合で負けちゃったけど、今度こそ（ b ）勝って見せる。

a) きっと b) 必ず c) aとbどちらでもいい d) aとbどちらもだめ

3. 明日はとても大切な会議があるので、（ b ）10時までに来てください。

a) きっと b) 必ず c) aとbどちらでもいい d) aとbどちらもだめ

4. このあたりは冬になると（ b ）雪が降る。

a) きっと b) 必ず c) aとbどちらでもいい d) aとbどちらもだめ

5. 仕事中は（ b ）その場にいなければならない。

a) きっと b) 必ず c) aとbどちらでもいい d) aとbどちらもだめ